
 学 会 記 事

第 91 回新潟内分泌代謝同好会

日 時 平成 22 年 5 月 22 日 (土)
午後 3 時～
会 場 万代シルバーホテル

I. 一 般 演 題
1 当科で経験した甲状腺クリーゼの 3 例

植村 靖行・北澤 勝・森川 洋
石澤 正博・金子 正儀・鈴木 浩史
松林 泰弘・鈴木 裕美・小菅恵一朗
羽入 修・相澤 義房

新潟大学医学部第一内科

甲状腺クリーゼは発症機序や誘因が必ずしも明らかになっていない病態である。また、明確な診断基準や治療指針が存在しておらず、2008 年に発表された診断基準を元に全国調査を行っているところである。

2008 年 4 月から 2009 年 12 月までの間に当科で経験した甲状腺クリーゼの 3 例について基礎疾患・発症誘因・検査所見・治療・予後についてまとめた。

①高齢者は容易にクリーゼに移行するため外傷時やアイソトープ治療時には入院の上、慎重な全身管理が必要であると考えられた。

②クリーゼによる症状が単なる併発症なのか判断に困る場合があるが、救命のためには疑い例であってもクリーゼに準じた対応が求められると考えられる。甲状腺クリーゼはバセドウ病の早期診断や術前甲状腺機能の管理が行われるようになり減少してきているが、未だ致死率が高い病態である。他科の医師が診療に当たる機会も多

く、早期に診断基準の確立と治療方針の作成が望まれる。

2 エコーガイド下、甲状腺穿刺細胞診への取り組み～3年間の結果～

宗田 聡・佐藤さつき・山田 貴穂

新潟市民病院内科

甲状腺細胞診の新しい報告様式により、細胞診の管理精度は付帯事項として検体不適切検体数は検査総数の 10 % 以下に留めることが望ましいとされている。安定した検査体制と精度に対応すべく、当科は 2007 年 12 月より 2 人検査体制でのエコーガイド下交差法を用いた甲状腺穿刺細胞診に取り組んだ。開始時から 2010 年 4 月までの検査結果をまとめたところ、検体適切率は 48.0 % から 74.0 % までに改善した。甲状腺エコーの被験者数はのべ 895 名、結節病変は 454 箇所を認めた。そのうち、組織診断で悪性と診断されたのは 48 症例 (10.8 %) であった。パパンニコウのクラス分類のクラスⅢ以上の検査精度は、鋭敏度 91.7 %, 特異度 47.6 % であった。今後、更なる検査技術の向上に努めるとともに予後に対しても注目して観察する必要がある。

3 イレッサが奏功したと考えられる進行甲状腺癌肺転移の 2 例

片桐 尚・本田 茂・涌井一郎

厚生連刈羽郡総合病院内科

進行甲状腺癌肺転移の症例に対してイレッサを使用し奏効した (進行を抑制した) と考えられる 2 例を経験した。

〔症例 1〕43 歳、女性。低分化扁平上皮癌、EP 療法、原発巣切除の後、肺転移にイレッサ (16 ヶ月)、その後 Carboplatin + Weekly Paclitaxel 併用療法を (19 ヶ月) 継続投与、この間在宅医療が可能となり、治療開始後 3 年 3 ヶ月の延命効果を認めた。

〔症例 2〕59 歳、女性。乳頭癌、原発巣切除、アイソトープ内照射施行、その後急速に増大した肺

転移に対してイレッサ投与, 12月たった現在もSD (stable disease) の状態を維持している。

イレッサは従来肺癌(非小細胞肺癌, 特に腺癌, EGFR 遺伝子変異陽性例)に対して効果があるとされている。本症例においてはEGFR 遺伝子変異の有無は検索していないが, 一定の効果があったことを考えると, イレッサは甲状腺癌, 特に腺癌の肺転移に対する有力な化学療法になる可能性があると考えられる。

4 甲状腺刺激ホルモン産生下垂体腺腫の外科治療

米岡有一郎・神宮字伸哉・妻沼 到
森井 研・田村 哲郎・藤井 幸彦
新潟大学脳研究所脳神経外科

【目的】当科における近年のTSHomaの治療成績を検討する。

【方法】過去10年間に当科で治療され病理診断が確定している7例を後方視検討。

【結果】内訳は男性が4名, 女性が3名で, 入院時年齢は8~70歳(平均37.6歳)であった。全例がNacroadenomaであった。このうち1例(40歳男性)は甲状腺機能亢進症顕性前に頭重を契機とした画像診断にて下垂体腺腫を指摘されたが, 他は甲状腺機能亢進症もしくはInappropriate secretion of TSH (SITSH) で発症。先の3例が顕微鏡下経蝶形骨洞腫瘍摘出術(TSS)にて, 後の4例内視鏡下(eTSS)にて摘出。TSS症例のうち2例で海綿静脈洞浸潤(CSI)を認めたが, eTSS症例ではCSIを認めず。

【成績】TSSでは3例中1例で術後に寛解。eTSSでは4例中4例で術後に寛解し, 退院時にHydrocortisoneの補充を要した症例は無く, 4例中3例でLevothyroxineを補充。

【考案】CSIを有す2例のTSS症例は外科的寛解を得られず。CSIを欠くeTSS症例では4例とも寛解。

【結論】CSIを伴わず, 巨大腺腫でなく, 硬くないTSHomaは, eTSSにより寛解が期待できる。TSHomaは稀ゆえ, 更なる症例蓄積を要す。

5 ミトコンドリア糖尿病(3243変異)に対するCoQ10療法を試みた1例

鈴木 克典・花澤 秀行*
済生会新潟第二病院代謝内分泌科
同 耳鼻科*

症例は男性, 41歳。2006(平成18)年(38歳時)に1型糖尿病と診断され, 埼玉県の某総合病院に3週間入院。混合インスリン2回/日注射の治療が開始された。同時期に両側の難聴を発症し, 感音性難聴と診断されていた。2008(平成20)年(40歳時)に神奈川県総合病院に入院し, Basal-bolus治療に変更された。2009(平成21)年(41歳時)7月7日に自殺目的に新潟市の海岸で昼からインスリン注射をせずにいたところ, 7月8日未明, 腹痛・嘔吐があり, 当院に救急搬送され, 糖尿病性ケトアシドーシスの診断で入院した。肥満歴はなく痩せ型(BMI 15.5kg/m²), インスリン分泌能低下, 難聴などの臨床像からミトコンドリア糖尿病を疑い遺伝子解析を行った。ミトコンドリア遺伝子異常(3243A→G点変異)を認め, ミトコンドリア糖尿病と診断。食事療法, インスリン療法とともにcoenzymeQ10(CoQ10)療法を開始した。2010年1月に施行した聴力検査において感音性難聴の若干の改善を認めたが, インスリン分泌能は不変であった。

ミトコンドリア糖尿病に対するCoQ10療法は試みられるべき有用な治療法の1つと考えられた。

6 胃酸分泌抑制薬と生活習慣病

山田 絢子・高村 麻子・早川 晃史
高澤 希子・山谷 恵一
新潟通信病院内科

近年, 非肥満糖尿病マウスにDPP-4iとPPIの併用療法を行うと血糖値が正常化したとの論文発表があった。我々はヒトでも血中ガストリン濃度が糖尿病に関与するのか? 胃酸分泌抑制薬内服中の患者は糖尿病や他の生活習慣病の合併に差異や特徴があるのか? を検討するために調査を行った。